

# 現代ロシア語との対照における ロシア語史の授業について

山 田 隆

本稿では、ロシア語教授法上の試みとして現代ロシア語文法に範囲を限定して、それとの対照においてロシア語史の基礎知識を教授する方法を考察する。従来、ロシア語史の授業は現代語の授業とは切り離されて、別の対象を扱うものとして区別されてきた。確かに、ロシア語史が講義内容として扱う史的文法 (историческая грамматика)、標準語史 (история русского литературного языка)、もしくは古文書の講読 (чтение древнерусских памятников) 等は、その内容や要求される知識の質的相違から判断して別枠を設定するに値する。しかし、同時に、4年間のロシア語課程に、この内容でのロシア語史を導入することは、場合によっては新しい言語を学び始めることに等しいという結果にもなる。古代ロシア語と現代ロシア語は、通時的には一つの体系に属するものとはいえ、音韻、形態、統辞、語い論的に一致しない点が多く存在することを考慮すれば、学生にとっては、やはり、新しい、もう一つの別の言語としてうけとられる。

語学上の知識を蓄える際、それまでの知識を基として学習対象との比較、検討を通して新しい知識の獲得を計っていく方法は、現在学習しているロシア語を手がかりとしてロシア語史を学ぶことを想定した時にも妥当性があると考えられるので、筆者は、この方法をロシア語史の授業に応用する試みを行なった。

ロシア語文法の授業を受けている者は、文法規則に例外のあることを知っている。そして、文法体系に占める例外の重要度は、当該規則の適用範囲の大小に比例する。

例えば、動詞 *дать* と *беречь* の不定法を例にとって子音交替の観点か

ら両者を比較するとき, \*dad-ti дадти> дасти> дати> дать に現われる子音の異化作用とС音の脱落現象よりも, \*bereg-ti берегти> беречи> беречь や \*pek-ti пекти> печи> петь に現われた子音交替とそれに伴なう造語作用の方が, 生産性も, 適用語い数も多い。同種の子音交替は, 「後舌子音+軟子音」の構造外にも, 子音 [j] が単独に作用して, 一連の子音の軟化, 口蓋化現象を引起こすことになる。文法便覧<sup>1)</sup>などで挙げられる,

с-ш : писать-пишу ; высокий-выше

х-ш : пахать-пашу ; ухо-уши

з-ж : возить-вожу ; низкий-ниже

г-ж : нога-ножка ; дорогой-дороже

г-ж-з : друг-дружный-друзья

д-ж : сидеть-сизу ; молодой-моложе

к-ч : река-речка ; восток-восточный

ц-ч : лицо-личный ; птица-птичный

т-ч : хотеть-хочу ; крутой-круче

ст-щ : пустить-пущу ; простой-проще

ск-щ : искать-ищу

などの交替例, さらに, 東スラブにみられる唇音変化にも言及が行なわれる。

б-бл : любить-люблю

п-пл : терпеть-терплю

в-вл : ловить-ловлю

ф-фл : графить-графлю

м-мл : кормить-кормлю ; дремать-дремлю

この種の音交替は, 単語力の増強を図る際, ある者は無意識のうちに習得している。『語形成辞典』(А. Н. Тихонов, Словообразовательный словарь русского языка, М., “Русский язык”, 1985), 『単語の構成』(З. А. Потиха, Строение русского слова, М., “Русский язык”, 1981) を参照すれば, 上記の交替が確認できる。

一方、この2つの動詞を別の観点、人称変化形から検討すると、今度は、*дать* のもつ特異性に大きな関心が集まる。*дать* は現在時制において *дам, дашь, даст, дадим, дадите, дадут* と変化する故に、*берег-у, береж-ешь* のいわゆる生産型動詞とは明確に区別される。*дать* のような非生産型動詞が現在ではわずか2語であったとしても、接辞付加による造語法が有効である間は、強固な基礎と勢力を持っているといえよう。

また、子音の同化現象についてロシア語教科書<sup>2)</sup> では次のように記述する。

《……》 1. 有声子音 *б, д, г, в, з, ж* は語末、および無声子音の前で、それぞれ対応の無声子音 *п, т, к, ф, с, ш* として発音される。

*клуб* [klúp], *лодка* [lótka], *ножка* [nóʃkə].

2. 無声子音 *к, т, с* は有声子音（ただし *в* をのぞく）の前で対応の有声子音 *г, д, з* として発音される。

*сдача* [zdátʃə], *отзвук* [ódzvuk]; *свой* [svój].

《中略》 注 2. *л, р, м, н, й* は同化の現象にいっさい関係がない。

《略》。

引用文中の注2にある5種の音については自鳴音、鼻音、半子音という中ば独立的性格をもつ音、すなわち、準音節を構成し得る音価として評価されるから、同化現象から除外されるが、子音 *в* については説明がつかない。*ф-в* のペアを組むとされ、*завтра, всё* に有効な原理が *свой* に適用できない理由は何か。一方の子音を異言語要素、借用された音として解釈する以外説明の方法がない。

教科書の中に興味深い問題は多く存在する。本講義は、現代ロシア語の授業の一環であり、ロシア語を一層深く知る一手段としてとらえられているので、その構成やテーマの選択は現代ロシア語の視点から設定されることになる。そこで筆者の提案する授業運営の原則は、

1. 授業科目名と筆者の授業構想の性質上、受講生の現代ロシア語文法の基礎知識は、既にできあがっていることを前提とする。

2. 講義のテーマと内容は、音韻論、形態論、その他に大別し、下位区分毎にトピックを設ける。

3. 文法は、概して整合性を求めるが、初等文法書に散見される特殊事項、例外的項目を中心にトピックを編成するため、講義では文法の整合性を第一義にするのではなく、これらトピックの解明にあてられる。この意味で、現代文法の授業とは相補関係にある。

4. 講義内容に則していると考えられる古代ロシア語の文法書は、巻末に挙げる通りであるが、学生にとっても解説のわかりやすいもの、入手し易い書籍を選んである。引用や例示する際、学究的、そして、余りにも詳細な内容に及ぶ論文等は、不適當と考える。

#### 講義内容の検討

上記の原則に従って、講義で取上げる内容を示してみたい。

#### 〔音韻論に関する事項〕

##### 1 鼻母音 ѡ, А

- 子音 'м/'н の出現 (взять-возьму, начать-начну)
- 綴り -нять における -н- の出沒 (принять-приму, занять-займу)
- 体のペアの形成 (принять-принимать, занять-занимать)

##### 2 弱化母音 ъ, ь

- 弱化母音 (редуцированные ъ и ь) とは。
- 音節の縮合 (истъба> изба, къде> где, подъкопъ> подкоп)
- 語末の無声化 (год, друг, нож)
- 子音の同化, 異化 (съдесь> сдес'> здесь, дъве> две[д'ве], к кому [х кому])
- 出沒母音 (сон-сна, день-дня, деревня-деревень)
- 発音されない音 (поздно, известно, солнце, сердце)

##### 3 母音 ѓ

- 現代語の母音 e のもつ歴史。

現代ロシア語との対照におけるロシア語史の授業について (山田)

- e から ë [jó] への移行 (несъ > нёс, села > сёла, льнь > лён, 但し лѣсъ > лес について)
- 類推作用 (нести の場合 несём, несете несут が予想されるが, 実際は несём, несёте, несут になっていることについて)
- 4 後舌子音 г, к, х の軟化
  - 口蓋化 (лик-личный-лицо, друг-дружный-друзи (друзья), тихий-тишина)
- 5 子音交替
  - 子音 [j] の存在 (писать-пишу, ходить-хожу, свет-свеча, любить-люблю)
  - 子音交替と造語作用 (наука-научный-учитель-учитель-ученик-учебник…)
- 6 母音重挿
  - 母音重挿の構造 (\*t o/e r/l t)
  - 意味による分類 (並存ならびに競合 город-град, голова-глава, 一方のみ現存 береза, время)

[形態論に関する事項]

名詞

- 1 格変化のタイプと文法性の関係 (год と село が同一語尾をもち, год と дом は別の変化をする。лес (男) と лесо (中) が同一テキスト内に現われ, гусь, лебедь が女性, степень は男性名詞扱いだったことについて)
- 2 呼格
- 3 双数
  - два, оба と名詞語尾
  - 双数の消失とその影響 (双数語尾と複数語尾の競合 глаз-глаза-глази, 数詞 2, 3, 4 と名詞の結合)
- 4 格語尾の競合

- 変化表の減少（格変化の融合，複数形変化の女性名詞型への一元化）
- 男性名詞（単数生格語尾 -а/-у, 前置格 -е/-у/-и, путь の変化, 単数主格と複数生格語尾が等しい例 один раз-много раз, один человек-5 человек または 1 грамм-100 грамм, 複数造格語尾 -ы と関連して по-русски の語尾について）
- 女性名詞（対格が主格形と交替する例 любви〉 любовь, Москы〉 Москва）
- 複数生格語尾
- 活動体と不活動体の区別（Отъць видитъ сынъ. -Сынъ видитъ отъць. 女性名詞への適用）

### 代名詞

- 1 язь の単音節化（単音節の ты, мы, вы との対照において）
- 2 Я те дам! Бог тя знает! にみられる人称代名詞の短縮形。
- 3 前置詞結合における三人称代名詞の語頭の н- について（前置詞 кън, вьн, сън〉 к нему, в него, с ним, 類推作用における -н の出現 у него, от него, о нем）
- 4 его を [евó] と発音することについて
- 5 三人称代名詞複数形 оне
- 6 動詞接尾辞 -ся
- 7 сама の対格 самое について

### 形容詞

- 1 形容詞長，短語尾形の意味と用法
- 2 長語尾形の形成（形容詞短語尾形 добръ+代名詞 и〉 добры+代名詞 и〉 добрыи）
- 3 物主形容詞
  - ロシア人の姓（Петров, Пушкин）
  - 地名の形成（Киев, Львов, Ярославль）
  - 物主形容詞と慣用表現（антонов огонь, прометеев огонь, ...）

дамоклов меч, Мамаев курган, Марсово поле)

4 19世紀文学作品にみられる形容詞の用法

- 男性単数主格における -ой (Белеет парус одинокой.)
- 切詰型の長語尾形 (На добра коня садясь...)
- 女性単数生格の -ья

5 比較級

- 単一比較級語尾 -ее, -ейш-
- 比較の接頭辞 наи-, пре-, по-
- 最上級を表現する語 самый, очень

数詞

1 数詞の再分類

- один, два, три, четыре は形容詞, пять, шесть 以上を名詞として扱い得るか, について
- 語尾の統合
- пять を女性名詞で扱った文献

2 одиннадцать と двадцать の組成

3 сорок, девяносто について

- 単位の役割を果たす数詞 (девять, десять, девяносто)

4 数を意味する語 (три-трое-тройка)

5 文字による数字の代用

動詞

1 不定法語尾 -ть/-ти/-чь の形成

2 語幹について (不定法語幹 бра-ть と現在語幹 бер-ут)

3 現在変化形

- 子音語幹動詞 быть, дать, есть の特異性
- 動詞 хотеть の2種類の変化形

4 命令法

- 1, 2, 3 人称の命令形
- 音韻交替 (петь-пой, мыть-мой, пить-пей)
- 5 過去時制における動詞の変化
  - 4種の過去形 аорист, имперфект, перфект, плюсквамперфект
  - Я читал, читала の起源 (冗長度の増大による助動詞 *юсмь* の消失と形動詞の本動詞化)
- 6 体の発達 (動詞変化形の縮少と接辞の発達に伴う造語作用)
- 7 無人称動詞の考察
  - 『崇高なもの』の存在 (смеркается, знобит)
  - 人称動詞からの派生と造格の使用について (Пахнет сено. –Пахнет сеном.)
- 8 形動詞と副動詞
  - 形動詞の意味と用法 (定語的, 述語的用法の観点から)
  - 古代ロシア語の能動形動詞現在と現代ロシア語での形容詞への転用, 不完了体副動詞との関連 (дремучий лес, работать играючи, ида)ндя)
  - 能動形動詞過去と完了体副動詞との関係 (узнавъ)
  - 被動形動詞の形成

## 副詞

- 1 副詞の形成法
  - 古くから存在する語 (接尾辞 -да, -гда, -де, -уду; куда, где, всюду)
  - 他の品詞から派生した語
    - 名詞 (сегодня, вечером, шагом)
    - 代名詞 (весьма, потом)
    - 数詞 (опять, однажды)
    - 動詞 (зря, обыкновенно, почти)
    - 前置詞結合 (завтра, слишком, всмятку)



現代ロシア語との対照におけるロシア語史の授業について (山田)

бережливо <動詞語幹 бер- + 形容詞語尾 -лив- + 副詞語尾 -о の複合派生。

[その他]

- 1 印欧諸語におけるロシア語の位置
- 2 ロシアにおける文字の発生
- 3 1917-18年の文字改革
- 4 ロシア人名について
- 5 ロシア農民層の月名と他のスラブ諸語

次に弱化母音 ъ, ь で具体的内容を例示してみよう。

ステップ 1 : 対象の提示

出沒母音 : сон-сна; отец-отца; крепкий-крепок; согласный-согласен

子音同化 : вокзал [вагзал]; отдыхать [аддыхат']; завтра [зафтра]  
(有声・無声)

: дверь [д'вер']; свет [с'вет] (硬音・軟音)

語尾の無声化 : рад [рат]; зуб [зуп]; Киев [киеф]

発音されない文字 : праздничный [празничнй]; устный [уснй]

語尾の脱落 : нёс-несла; рос-росла; мог-могла

ステップ 2 : 対象の展開

上記の現象は、弱化母音 ъ, ь の消失という共通の起源をもっている。弱化母音そのものは一定の音価をもっていたとはいえ、フル母音 (гласные полного образования) に比べ音価が不安定であったため、12世紀頃、語末の位置から脱落し始めたと考えられる。脱落は全ての弱化母音に及んだのではなく、一定の規則に従って、脱落して消失したものとフル母音に格上げされたものに区分される。

脱落の起こる場合は、

- 1) 語末 : городъ > город ; пять > пят'
- 2) フル母音の前の無アクセント音節にある弱化母音 : Смольнскъ > Смоленск ; жьньць > жнец

フル母音になる場合。この際、ъはo、ьはeになる。

- 1) アクセント音節にある。: тьмень > темен ; рьпть > ропот
- 2) 弱い立場の音節の前にある弱化母音 : пальць > палец ; узькъ > узок ; тьмно > темно
- 3) рかлと結合して、任意の子音にはさまれているとき。: вьрхъ > верх ; вьлкъ > волк

(例)

сънь : съна > сон : сна	дьнь : дья > ден' : дня
мъхъ : мъха > мох : мха	львь : льва > лев : л'ва
съто : сътъ > сто : сот	вьсь : вьсего > вес' : всего
зьль : зьла > зол : зла	крепькъ : крепька > крепок : крепка
съ мьною : съ тобою > со мной : с тобой	

但し、弱化母音の強弱の原則に従わない例が存在する。それらは、類推作用の結果できたものと考えることができる。これには、o/eを捨うものと、逆に、フル母音を落とすものがある。

(捨う例)

ветрь (>ветер) : Отъ ветрь боурьныхъ. Отъ четыре ветрь.

(Срезневский)

ветрь : ветра	дьнь : дьне
( ? ) : ветра	( ден' ) : дня

右の図式を、左にもあてはめて、本来なかった音を挿入したものと考えられる。同様の例は、огнь (>огонь), сестрь (>сестер) にもある。

(落とす例)

ледъ : леда, ледоу и пр. О кресте, иже на земли и на леду пишють. (Срезневский の記述)

ледъ : леда		день : дьне
лед : (?)		ден' : (дня)

上の場合と逆の現象である。Срезневекий の辞書でも、e の音は落とさないことと断っているのに、現在では лед, льда, льду と変化する。類例として ров があるが、Срезневский には ровъ=ръвь とあっても、引用されている例は全てフル母音の使用である。現代語の変化は、ров, рва, рву。

(出沒母音の結果だけ借用した例)

рынок : 17 世紀末から 18 世紀初めにポーランド語から借用 <rynek

студент : 18 世紀初頭にドイツ語からの借用 <student. студентка が、それからの派生語とすれば、起源が 18 世紀以前にさかのぼることはない。

пионер : 19 世紀にフランス語から借用 <pionnier. пионерка の派生と語尾変化についても、 студентка に準ずる。

ъ, ь の消失が 12 世紀に完了し、結果だけの借用語が近代以降ロシアに入ってきた語だとすれば、これら近代以降の借用語には、強い造語作用をもち合わせていることが明らかになる。

さて、弱化母音が消失したことによる影響を挙げてみよう。

その 1 閉音節の出現と音節数の減少。これは、表記、発音両面に現われた現象で、言語構成の質的变化をもたらした。мъхъ (2 音節の開音節) > мох (単音節で閉音節), жьньць (жь/нь/ць > 3 音節の開音節) > жнец (単音節の閉音節)。

その 2 従って、今までになかった子音結合が発生し、子音の同化が起こる。

узъко > узко > [уска]            бъчела > бчела > пчела

ножька > ножка > [ношка] (無声化)

къде > кде > где            съдесь > сдесь > здесь

дъвашьды > двашды > дважды (有声化)

Русьска правьда > Русская правда    красьныи > красный (硬化)

дъве > две            съведение > сведение (軟化)

子音の異化があり得る。

кѣто> кто> (хто)      чѣто> что> [што]

その3 語末の無声化。前置詞 *через* を例に, Срезневский の辞書には  
*Помостиша мостъ черезъ Великтю реку.*

*а сами поидоша черес ночь къ Мичьску.* の2種の語尾が残されている。

その4 発音されない文字の出現。子音結合の結果, 発音の経済が働いたと考えられる。

その5 子音の脱落。*несль> несл> нес : несла.* 例語中の弱化母音が落ちたため, 2つの子音を支えられなくなって, 語末の子音をも落とすと考えられる。

その6 出沒母音の現われ。

### ステップ3 : 評価について

既に述べてきたように, 現代ロシア語の理解を深めることに主な目標を掲げている本講義は, 学習の評価についてもこの考え方に沿って行なわれる。評価そのもののあり方については, 学習の熟成度を調べるものと, 学習過程の適否をみるものがある。講義内容に盛られている「類推」「同化」「異化」「対照」などの現象とその手法は, 他の分野での応用が可能である。しかし, 講義の基本的な枠組みを現代ロシア語に限定してあることといわゆる古代ロシア語に対しては橋渡しの役割でしか考慮していないので, ここではまず, 知識の有無, 知識の定着度を測定するのが妥当と思われる。この考え方に基づいて作成した設問を若干例示する。

(問) 各語に対応する現代語綴りを書きなさい。

- |   |       |    |          |    |          |
|---|-------|----|----------|----|----------|
| 1 | звѣкъ | 6  | възати   | 11 | къдѣ     |
| 2 | пѣть  | 7  | красьныи | 12 | сѣдѣсь   |
| 3 | зѣбѣ  | 8  | узѣкыи   | 13 | вьсьде   |
| 4 | ма со | 9  | дѣнь     | 14 | въ вѣрхѣ |
| 5 | времѣ | 10 | сѣнь     |    |          |

現代ロシア語との対照におけるロシア語史の授業について (山田)

このタイプは出題し易く、また結果も明確な形で出てくる。ただし、被験者が授業での知識によらず、直観的に、対応の現代語を解答する時、正確な評価を得ることができない。

(問) имя や занять 変化させること、語尾に 'н/'м の音が現われる理由を述べなさい。

(問) весь-вся, деревня-деревень, крепкий-крепок などにみられる出沒母音の根拠を述べなさい。

(問) 前置詞と結合する時、к нему のように 3 人称の人称代名詞の語頭に н- が出現する理由を述べよ。

記述式の場合には、出題の対象について系統的理解を得ているか否かの判定に使用する。

(問) 各々の格変化に対応する単数主格形を空欄に入れなさい。

	古代ロシア語	現代ロシア語
1	( ), камене, камени,...	--- ( )
2	( ), чудесе, чудеси,...	--- ( )
3	( ), време, времени,...	--- ( )
4	( ), матере, матери,...	--- ( )
5	( ), любьве, любьви,...	--- ( )

評価の方法により、評価の過程そのものが学習と等価になるケースがある。すなわち、出題されたことを契機に、一層の知識の固定化が図られるか、または、新たに学ぶべきこととして知識の中に取り入れられるかである。いずれにしても、出題の形式と範囲が、授業の再現、もしくは総括として作用する場合がある。この点については、別稿で改めて問題にしたい。

注

1) и. м. Пулькина и Е. Б. Захава-Некрасова, Учебник русского языка для студентов-иностранцев, М., "Русский язык", 1975, стр. 13

2) С. Кимура, Элементарный курс русского языка, Токио, "Хакусуи", 1981. стр. 12

参 考 文 献

- 1 В. В. Иванов и З. А. Потиха, Исторический комментарий к занятия по русскому языку в средней школе, Москва, “Просвещение”, 1985
- 2 佐々木秀夫著・編, 『ロシヤ古典』, 東京, ナウカ  
    卷1                   (1982年)  
    卷2 追章           (1983年)  
    卷3 音韻考       (1985年)
- 3 木村彰一著, 『古代教会スラブ語入門』, 東京, 白水社, 1985年
- 4 В. В. Иванов, Историческая грамматика русского языка, М., “Просвещение”, 1983
- 5 Н. Г. Самсонов, Древнерусский язык, М., “Высшая школа”, 1973
- 6 И. И. Срезневский, Материалы для словаря древне-русского языка